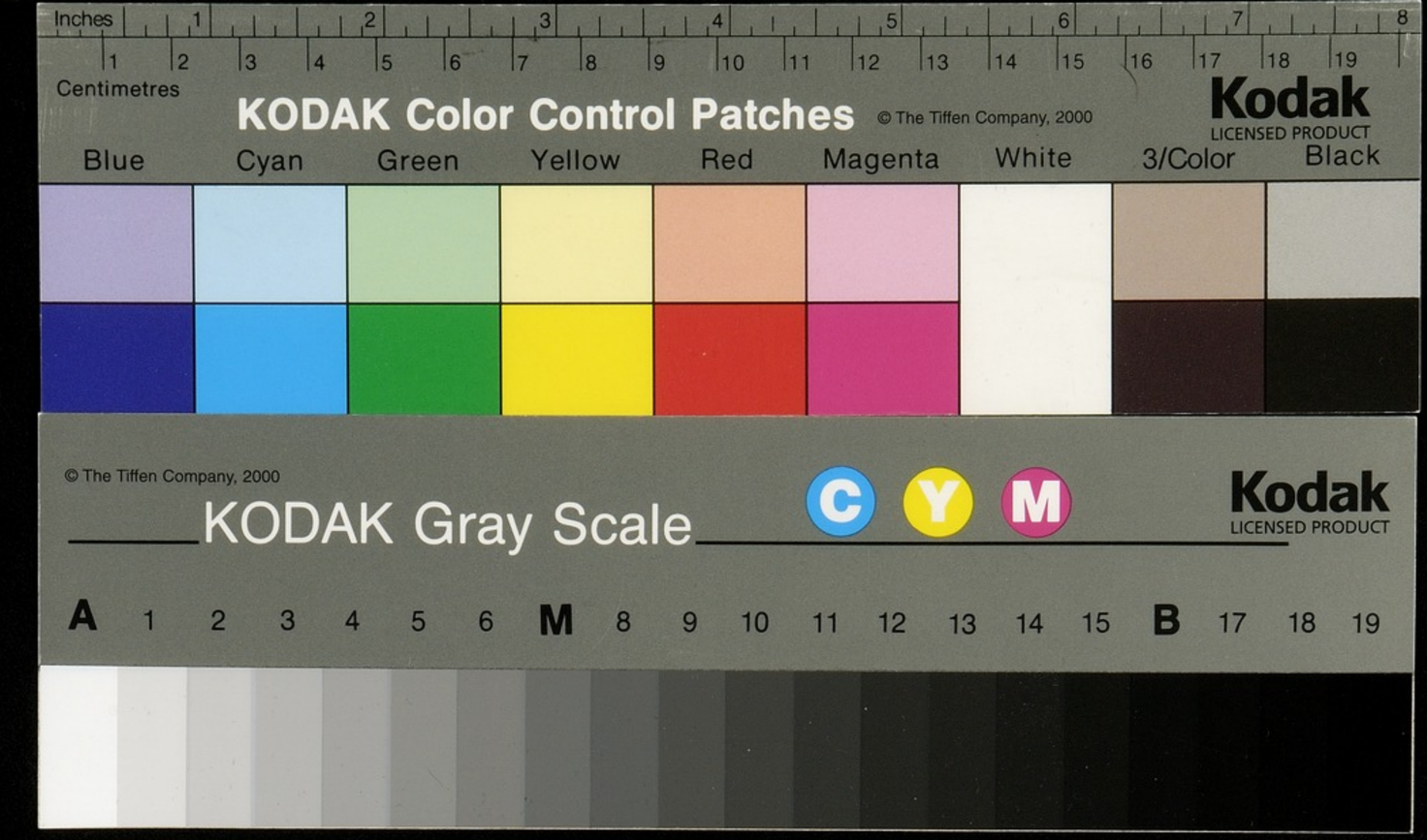

Inches
Centimetres
KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C
Y
M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


0
50
100
150
200


新鐫
椿說弓張用
續編
卷六

『椿說弓張月』続編巻六

東都 曲亭主人編次

第四十四回

尚寧王戯言もて禍を喚ぶ

中婦君の悪報創まれる

尚寧王の三十八年庚申（即ち本朝安元二年）秋九月七日の夜亥の三の比及ぶ。中婦君。俄頃ふ[illegible]産の氣つかれもよほしぬとのたまふ。産室へ冊入る。女官ら良醫所にまうでて。宮女内官ホ奔走する程ふ。國相利勇。いそぎまゐりて。尚寧王に謁す。尚寧王。[illegible]とらんとて。漫ゝ出居そること久許さて。天ふ訪び地よ訪び。産室へ使をつかはして。[illegible]の[illegible]を問ふこと只是掫の[illegible]を挽がごとくいく程もなく。王子誕生ましまして母子安泰ぬるとまうしぬ。折ふら曚雲忽ち[illegible]塔の下ゐまり當下尚寧王ハ

曚雲氏宝位のほどうたがひなくて。満面ゑみ笑ひ含こ國師の神
著空へかくびして。王子誕生せり。こび児悉く生育べしや。久後の
吉凶を説きこしめんと仰されば曚雲これをうけたまはり。殿下ほど
安く思召れよ。曩ゐも窟ゐ亶示せしごとく。王子ハ權者の後身ゐ
ほゝませば。聰明叡智世ゐ傾ぶく壽命ハ天地とともに等しるべし。
そゆへ音宮氏営こて。世子ほ立二ゑ歳よりまづ速ゐ位を傳
く。万機の政をきこしめさん。ちうべ邦家まもゝく泰平ほして士民
徳化ゐ浴し。道ゐ迷ふれを拾ひこそ夜戸ゑ須ど。竟風舜雨。五穀
を播こて。絶こ賊民あることなからん是併。殿下有道の餘慶ゐそ。
とまうせしぶ。王限りうゝく致びして。産育等閑なくこそ慈愛まふ
ゐ利勇ハ腹心の家隷。何ぶしが妻をものが姪なりこひらくこく。

乳母ほ進ぶし。もゞてうぶ方人のこに。藥餌を主ゝくせしうべ。衆言定
ゑ疑こ。中婦君。年の齢五十ゐちう。月来氣孕こるゐもあれ
さて。猛ゐ王子ゑ産まふことゐと怪こて。竊ゐ誤るゐものあれど。
曚雲利勇が指威ゐ怕ぢて。明白ゐいはしもうゝ。忠あるゐのハ
これを歎て。侵人ハこれを祝こて。媚ゑその寵ほ求ゐも多くり。とかく
すること。四五十日ゑ経て。産室こりの日子果母子既ゐ肥ぢまひ
ふれば。尚寧王ハゐ曚雲ゐ吉日良辰をトはし。國中に大赦
ゐこく。北谷の阿公ホもゞて罪あるゐの祝免こ。本日三司百官ゑ龍
宮城へ召集合て。王子降誕のゐ賀を受海鮮野味烹調蒸炙
の珍膳をけゝねて。酒食を賜ひ。楽正堦下に候じて。天孫歌太
平調ホの舞楽ゑ奏そ。この日東風平の按司。陶松壽のこら

頬しとてふゝび宝位の右辺あ。中婦君。鳳冠を戴て霞帔を被て。王子妃妹毋を抱し。水晶簾の裏あり。左のうしろあ。曚雲國師黄冠を戴き。道衣蕙帯して侍立せり。その餘。國相利勇を首として。法司。紫巾官。按司。黄帽官。親雲上。里之子あ至るまで。官帽を正し。袖をつらね。斑行ちく三跪九叩ひの礼を行ひ。こゝ万歳とぞ祝しまつりしかれ。かくて奏樂もすみ果しころ。尚寧王を利勇を近く召。御ふみもちゐくるゝ児の震嚢を稱嘆そよりて。今より。東儲まうけとゝへども。彼生まれてより未だ百日を過ざれば。才嚢ありとも稱さゝれも。よーなれあ似ろう。ふゝび百官その幼子を侮りそのそ従ざるその為ん欤。このゆいでめるべしと。利勇答まうしけるう。王子繦褓の中に在せども。原是擔者の後身ろう。且殿下の聖算既あ六十あまりの人へ世子ぬ立れんるあ嫌しとぜぞ。いまゞ聞召れざや。近属富翁河の上あ偃子集合ちく民謡そ。その謡ふ

神人来兮　富藏水清　神人来兮　白沙化米

といくう。これ則王子降誕の前象ろう。躊躇のふるまひかと悼る意きるく。曩あれ。崔旧虬山の虬塚ぬ穿起さんとせーとそたあ。都下の童子あ童謡して。

惡神来兮　海潮不清　惡神来兮　白砂化蟹

とうこへり。ふして國師忽然と出現そこれ何のこゝぞや。と問利勇荅ること能ざるに。曚雲その氣色をそくく。うち微笑斑をそめてまうしけう。殿下ゐとて曉ぬまつざる。曩あ悪神来兮と。謡ひ八王のぬ子ろふばる。寧王女をりて東儲としまのを消れり。かくく

王女を廃しの事を因て王子降誕ありぬ。されば神人来ていと稱贊て悪神よ殿下の御亂るゝ事を王女がいひ。神人よ權者の後ありを在と王子をそうひ常言空しからざるやとおもふじく回答しべ。利勇もあつまりて嘆賞す中婦君ハ。このはしがゝて斜ふひ飲じ。殿下などて孤疑しまふかれ祥瑞あるものを誰よ否し仕るべきと立世子のみを。浅定めにしまふ人にしとさふ往時尚寧王忠臣の諫を聽ざ。虬塚を發て。不覺ふ悪魔を走ぜ。曚雲遂ふ國中よ横行そうて悪神来ずて白砂化蟹とよ童謡せり。今亦神人来ず。富藏水清と童謡するのハ源爲朝。王女を扶掖て。小琉球より。國ひの浦ふ著紙し。久志金武の間切を孕て。富義河をうち渉て。遂ふ南風原ふ到るの祥なれを。尚寧王慮足ずびおく。両ながら曉ぬぞ。曚雲よ説惑されて。まもなく飲び内宮ふ仰く。珠の箱をとりまふして。こゝらこれを捧りて利勇ふ對ひ。今日より王子ハ久く東儲とし相國ハりて傳ととと傳國の神宝琉球三顆の珠ハ曩ふ寧王女がその一顆を失ひて。今ありて完ふばと。父ども。先規まもりて。これを王子ふ附属せん。彼りの善悪ハ。追ぞ後宮ふ類ず。あひして後よ中城の世子殿よ移し居もべされべ。桐國且くこの珠を守て等閑あるせそと説ふし件の珠を遍ふ。人へ利勇ふ恭しく受おさめて。三司百官ふ立世子のみハ今もそれがこゝろ万く歳と祝しまふ。且して尚寧王ハ又曚雲よ對ひ國師手ふ國のまふ禍福吉凶を説示そふ。一点違ふことなし。それ



おりふし名あれが心形あり。夫名あるものハ禍と福とのこと國師の神術ふ困ず。その形ハ見ることハ得ざれども。曚雲回蓉く殿下禍福ふ形をと宜へども。名あるものハ形あり。形あれバものハかならず名あり。名あり量がたきそふ。名字ハ日本ふハ日ハ大日靈尊とし月ハ月讀命と稱又さらえ男と異名と。僧家ふ日をるこて。阿弥陀如来と号ことれもそのこころるもおなじ。亦日の姓ハ張。名ハ表。字ハ長吏月の姓ハ文名ハ申。字ハ子光と。老子歷藏中経潛確類書引之ふえ況禍福の形をや。夫福ハその形牛の如く。身ふ肉申あり。五色鮮明あり。名づけて天鹿と。下ふ福をいうとといへり。沈約宋書又孟康ハ曰。角一ッあるを天鹿とを両角ハ辟邪とて。益天鹿辟邪ハ獅子の屬ふ。楊用修あへくく天鹿を蝦蟇の大なるものふ。その謬ことハ甚し。潛確類書近ごろ宋の哲宗の元祐年間ふ道士となり。市ふ托び。ごろら益言時聖人と稱ふ。風俗或ハ宋の仁宗の時と。古今通 纂要一名ハ福禄壽又南極老人と号し泰山老師と稱ふ。五雜俎 天竺ふてハ吉祥天女と号く。一名ハ功徳女人のみ猛利福徳の應報ありとぃふ。その形馬幅ふこえそう。東方ふ形をいうその名を幸魂と稱ふり。日本紀 その名ハ異なれども。その物ハこれ福をいふのみ亦禍ハその形牛ふ似て。頭ハ虎のごとし。これを鬼門と号く。往古黄帝神荼鬱壘ハ兄弟ありて。これを捕て虎ふ餌ふとぃふ。風俗通 唐の玄宗帝の開元年間窮鬼となりて帝の夢ふ入りて。ごぐら盡耗と名生ふり楊貴妃ハ繡香

再按ずるふ天禄ハさら年のごくふ。全身大なる鮮あり。其形ハのべて說類巻之六十第十九張ふつまびらかなる長元ハ異也

宋の哲宗元祐元年ハ日本堀河院寛治二年ふ當る。安元二年ふ至て八十九年以ふあたりハあこれら近ごろふ

囊と上の玉笛を盜去らんとして鍾馗の神夫を駈らる事文類類引逸志日云云
天笠あて八黒暗天女又黒耳女と稱。人間ゐ禍をなすといふ
相貌究て醜惡も倶舍論又祖庭事苑ニクハシ日本ゐハ赤形をいふぞ只その
名を麻我通未といふ。禍神ニいふなほ。麻我通未とハ禍神ニいふなほ。
東方の古言ゐ禍を未我といふ。日本紀又惡支を麻我許登と
訓しゝり。方葉これ則曲ゝて直うらなをゝいふなほ。その名も迷ま
異なれども。その物ハこゝる禍をいふなる。抑福ハ未しがくして。禍ハ招
ゝ易し。殿下まづいづれの形をうつし給ふ。仰の隨ゐこれを敎をべし。
と綽精細ゐ應ようせしうべ。尚寧王これをゆゝく。韈然と打笑ひ
國師かくのごく。博識微妙の神術あり。それその難たを後はして易
ゝ先ゐせん。速ゐ禍の形狀をゝ見せ給へと宣へバ曠雲いと易たるもの
と應つゝ口ゐ咒文を唱へ印相して眼ゐ閉じ。ありて外面をさし
招くゐ忽地筑登之ホ五七人怪ゝ獸を擔ぎ入ゝ庭上ゝ置ゝさて。ありて
一ぞ首ゝ長ゝ體ゐ覺ゐ彼ゝ似ゝ。ゝとゆゝ。これを見るゝ形ハ牛ゝ似ゝ頭ハ虎
階下ゐ牽居さし君臣肝ゝくこれを
ゝ類せり。當下尚寧王ハ矇雲をゝえゝりて。國師。この獸ハゝゞ國
ゐ未曾有のものゝ。その名をゝふしへと仰ゐ八矇雲うけあわりこれ
則問ゝ多くる禍るゝ。とまうしゝ。二司百官これを見て駭然と驚き
怪ゝこゝろゐ忌嫌ぎるのほ。王又矇雲ゝ對ゝ國師の神術ゐ依
ゝ。それ目前ゐ禍の形狀をゝ見ることを得ゝり。そもこの獸ゐ何の能

うある。と問ふに曙雲芒然として殿下彼常言を以てものぞや禍福ふ門なし只人の招く処よりす。國君善道なれば。その國を減さし按司無道なれば。その城を喪ぼし士庶人も道なれば。その身を保ぢ。これ此獣の能ふ。とまでもなくさて八雷押うるのおあらぶ。そ祇起して冷笑ひ暗君こびうち禍を招くこと久し彼いうぞ退くべた中婦君荒淫はして。後宮を濫り國相利勇權を弄じて寧王女を追討。民間ふ赤子祇奪ひうて中婦君の産りと欺くこと祇て國民歯を切て按司黄帽恨を含めの多し既ふその禍を来にしてこれを退ることふあると。ふその言語いまご治らざ。のとふ軟弱とそそる怪獣奮然として怒れる形勢眼ふ百煉の鏡ふ朱を注れこごく牙ふ千口の劍を逆よ我るごく一声哮りて。忽地瀧を引断離玉柱丹肉りと跳然と駭た怕ま。撲地と仆まてく縛切のひね中婦君ふこの形勢ふ。且驚き且怕れ。身祇狼狽して逃んとすれを。禍獣ふ脱しもやらざ直ふ向膕祇折ひし。仰さまに踏ふそ。いとあつなる右の足をおの前足ふて楚と踏そえ。左の足首に牙を立く。やりくと引裂ぎふ。中婦君ふ叫若と叫びも果ざ皮破ま肉開けて。二足の紅涓を引に似う。傷ふありて乳母妹母ふ魂更ふ身にそえて王子祇摸さまかえ抱そう。走り避んとすれふ足ふ人麗るやうもてるも血を是彼髄の肉を啖そられて。鮮血さと流ま出平山ふ紅酒を醸し亦是後宮ふ細腰祇美ひ。蜘蛛飢て螺螺み似う利勇ふこれを

紅酒ハ琉球の属嶋太平山ふて醸する酒ひその色くのあざ紅ひぞ




ふぐりひと
禍獣一ふぐり
いろ〳〵
怒て悉
ふぐりひと
殃ずる

て。吐嗟とでめく忙〳〵く王子ハ波殿を跳こえて。幸じく逃んとするふ。禍獣ハまさく柱ひく。欄干を突毀つ。死るのごく追ひ逼てく。裳ハ丁と曙笛ごと利勇ハ爰ハ安うつの境ともこれまんそえ。てゐごら禍獣の額をのぞいてまふ持これ珠を撲地と投はくねこで。明珠の徳あや怕をくん。さそごれ猛獣軟〳〵として。耳ハ伏せ頭を低つ。逡巡そ。その間よ利勇ハ王子を懐よむ〳〵く。喘く脱ね出歓會門のあるさに繋でこれ。馬ふ囚りうとうち跨。南風原ハ投て逃まりね。かくねふ。三司。諸按司。親雲上。里之子。筑登之ふ。面ちこうふ土の如くおりて。逃んとするふま足癱麻て雫だかりも動れ好ど戦慄くせんさべるく。国師願くハ救ひのくと叫びつ〳〵曚雲ハ裳を結りて。宝位ふ素と推あごう。長く黄これ臂を握拍て高ふうち笑ひ時するるく。尚寧王暗愚ふして。政事道ふ稱ど。天孫氏二十五代一万七千八百二年の正統こふ断絶そ。婁人などて曉らざる淫婦中婦君齢半百ふして子を産んや。利勇ハ懐ふちく脱去これ嬰児ハ彼ふ密ふ民間よ募め。その世を殺して。其子ふ奪ひ。王ふ欺とく。王子と稱るのなり。唐山の往古ハ徳ある人ふ譲て。天が下ふ治〳〵むつ。徳よろ〳〵く。天孫子ふ代るべし。汝らホこれふ従ひ生れ。我ごが主地ふ死んがくてもゐは感ひて。禍成怕まごでや。ね暗れを生く明れふ従ひともに歓楽して。福を子孫ふ傳んや。そ〳〵回答せよ。といふ。婁皆これ叶て首を叩れ神仙道徳高くして。天ふ大業ふ受のごく。維うその臣よるの氏頗ふざ〳〵ん。臣ホ柱石の寸ふしとくども。犬馬の労を竭してくども。速

母位ヨ即多人ひし。と阿波ひ一人おそる〳〵刃ひ起ーて利勇が投捨うる。
偽國の明珠を取ゝ進ゝとそれべ。朦雲大ゝよ訝びて件の悪獣を
さし招くゟ禍獣ハ尾を掉さ。抑うるごゝ〳〵。朦雲がはゝう近く寄
ふべうもあらぬ。曩ゟ寧王女の失ひうる珠ぞ。それ今佐ゟ即ゟ及
び。て。琉と球と二顆の珠陰陽全〳〵襲ることハ天この祥瑞を降さ
似うう。卿ホ。今より推るびてこれを朦雲法君とまうせよ。ほこう
かゟ告ゝひし。二顆の珠を破璨の皿に盛うゝべて。衆人ゟ指示せど。
こゝ万歳とぞ唱ゝる。この條のくものかさべて朦雲が幻術みて當初
一顆の珠を盗ゝとう今この獣よ吐ーて衆人ゟ惑さゝうかゝ
朦雲ハ群臣の慶賀ゟ受て王と中婦君の亡骸を薄く葬ら。
さてらふ。利勇今偽王子ゟ輔佐ーて。南風原の城ゟ籠るとも。
怕るゝに足らど只侮がくれゟ。東風平の按司陶松壽のこ件の松壽
ゟ原来毛國典が腹心のゟて。窓ゟ廉夫人の妹うる余婦真奠
ゟと夫婦の契約をらけ。偽りて利勇ゟ佐媚び貳なきのこゝ忘
ひ中城の討まをらけうて。査國吉と謀ーあひ。王女と夫人を
救んとするゟ。事急ゟして廉夫人遂ゟ自殺せ。その首をりて
利勇ゟ忻ゟ一方の囲とうひて。後ゟそく王女を落さんと計校ーが。
利勇ハ兵を退けど。さるかゝふ真鶴が死首ゟ刎て王女の牙
がうとし。実なれ功ゟ因ゝ按司ゟ拝任せられーのも。それこの
千里眼をりてよくそのゟを知ることくも。そゟ昔あれべこれを咎ど。
ちらび自つあてありうれも。それべ利勇ハ。佐ゟ即うるはしをゆん。

松壽をもて軍師とし幼主を挟く。軍丘ひを褒め日ふく首里を攻とらんと議をべし。されども松壽ハ真実ゐ利勇ゐ伏従るゐあらねバ彼がるゐふ心力を竭して到らて事速ゐ成べうふバはやく松壽が些の軍兵をおて推よするとも何程のことの如くなるべし。その餘北谷の阿公が徒こゐる足火よ向ゐ乞丐のごとし。されバ心肝の病ひゐあらず。只忽ふおこるこゐハ寧王女のこ今武勇勝ゐる筑登之。五十人ばかりて討まゐし。猛獣なりて翼とせんこゐの禍獣が色くかふゆくを向ふ。王女の隠家をおるべんぞ。とく〳〵といそしくろれハ筑登之ゐ命を稟ふく戎臭し剣を帯戟を横ふく禍獣を先よ走して忙〳〵走去ろ。さる程よ國相利勇ハ偽王子をかゐて抱て馬ゐうち跨ておのゞ采地のうる。南風原の城へ退えり。俄頃ふ龍城の唯伎をうえおうるこの日東風原の陶松壽へ。立世子の沙汰こうをおるゞとれハ病よ假托く首里へくふゝぞ。あうふ。その日申の比及ゐ。南風原より利勇が騎馬の使者ゐ。王と中婦君のうくなりのひねるよし以告来し。これを招くことゆゝびこ三遍ゐ及び〳〵ふ。松壽ハ大ゐ驚きてゐ勢四五十人をおて南風原ゐ趨た。その夜利勇ゐ會合しまふ間者を首里へ遣して縦のゐ体以張そおふ。そのりの翌朝走りかへりて。曚雲佐以簗て。中山法君と稱るといへども幻術ゐ怕ゐおゐ惑ひく。三司諸按司。彼を討んとするせぞ。そゐや悉属従ひてゐと告し〳〵利勇ハ只呆れ果て。ぜんそくべ以知らざ。さりともと。ひえ〳〵て。中山。山南。山北の諸按司へ雞毛の檄文を走て。速ゐ義兵ゐ起し。逆賊曚雲を討滅し。王子以首里へ入ゐ佐ゐ即進〳〵せんよし以諜するふ。或ハ利勇が累年の奸悪を




幼主を
扶く
利勇
南風原ゟ
乾ケ
軍勢を

憎ㇾ或ハ禍獣の為ㇾ族滅せ〳〵れんこと陥ㇾて。そのぐし〳〵その募
ㇾ恩ぞるのの好く。大里。真和志。佐敷。玉城。知念。具志川。麻文仁
喜屋武。真壁。豊城。小禄をべて十一箇間切の軍兵のこ。そのぐ〳〵
催促ㇾ随ひて出ㇾ来れり。よりて利勇ハ松壽ㇾ代りて軍師ㇾ阿公
を偽王子の傅とし。溝ㇾ添くし。塀ㇾ固くし。只かの禍獣を防ぐの
外こ。そのぐしくれるのもめふぐ。松壽も又おりふ所あれバ。志をそそふ
ㇾ致さこを。只いこづ〳〵ふ日を過をわこに利勇ハ頻ㇾ焦燥て。間切毎
ㇾ牌ㇾ召ㇾつ矇雲ㇾ滅そべて勇士も欲得こて募れり。

第四十五回

偽王子を挟ㇾ利勇軍兵を襲ひ
赤瀬碑ふ苦〳〵王女鳥朝ㇾ逢ふ

寧王女ハいねる九月二日の曛氏昏ふ越来なる石橋のほとりふく
悪少年ぐるみふ既ふ駆ㇾ集ㇾ白蓮姫の
霊魂ふ助られ。必死を脱ㇾ出く。恩納嶽ふこけ入う。その暁がこふい
こう〳〵。掟牌金査国吉ぐ中城ふ〳〵利勇が鼓兵ハ砍ら〳〵ㇾ辛
ぎ〳〵この山中へ走り駆んとするふ環會のひふれハ主従迭
ふ訣ぐる事限りなく。王女ハ。廉夫人の安否。真鈴が忠死のこを。
いひ出〳〵ㇾ泣ㇾ注ぐへば。査国吉ハ又鈴亀母子がこの代告ますれふ
ㇾ聞ㇾ又もうひふ。某こ〳〵へ来つる途ゆて路人のうち語こを。
廉夫人ハこのふ駆れ〳〵ㇾ入ㇾ。その実言こうせバいと痛
ㇾ哀くこそとまうひを。王女ハ。ㇾ聞ㇾ涙ハ只驟雨の降そ〳〵ぐ
ぬく。轉輾てそ注のふ。このとき白蓮の冥魂ハ。王女の耳ふそろそ
ありけん。声ざまねども。日来ふかこりありつべ。査国吉をさまぐに

いひ慰めはぐくすれども。獵者やうくる。夫婦のりのとおびたゞ忽然と出來りて。王女のほとりを踞て人もかよなど。世代潜びのあるよよくれど。蛇毒猛獸の患ひみたゞもめくびおのれく夫婦ハ。読谷山のほとりに住居そる。山幸おりおほびくくつが家ふてくせのく公の及んねへ。舎兄なれどとらふかくまでこゞうへなちくにめりおんとおぼせバ王女ハそこ。査國吉ハ泣ひく。件の夫婦ふ對ひ放ふ推量のごくふゆそこそ。寧王女ふそれおかそるなれ。継母中婦君嬖臣利勇瞞雲ホがるふ。おんみのあれ処なくなどまくとも。一旦雲開けて天日をこんふ時しなかくんやとおもかくもして舎藏進くせよ。世ふ出ゝのぐ。恩賞ハ乞ふよべしと。説示それ夫婦款びてものが公衰望脱く主従ふ被せ進てせ。郷導して讀谷山の白屋ふ支かくう。いと貧しくハ世を経営めど。公どうハ信しく。飯ふど炊く歓待くりちれよその夜より。査國吉ぐふ癘いくこ出く。遂ふ破傷風ふりくれが十月の中旬ふ到てて。中癘ハ半愈くう。さて獵者夫婦ハ毎日ふ山に入りて。夫ハ獣を猟くし妻を薪を樵り。或ハ磯よおりくらして。海蘊を拾ひく活業としつ有一日件の夫婦。いそがしく走てくりつ。寧王女主従よもうひ毎うのまぐ首里の形勢かゝやひ召ましてやものそれ此度中婦君のおん腹よ生ふせまくれ王子ふそ。さのふ龍宮城ふ三司官渚按司を召集合まふ折から。曚雲例の幻術りて。禍獣と怪獣ーて王と中婦君ハ

咲ひ殺にしおのれ宝位ふおし登りて。こゝろ法君と稱し忽地三省の地を并呑せ。國相利勇ハ辛じて王子なうた抱き。南風原よ逃入つゝ。松壽時阿公ホ〳〵もに事ハ識し。彼兇ホ屬洗して軍兵を招よし曚雲ハうら滅して。王子を位ゐ即なゝんと謀るとも賢ゑも愚るも。こゝ彼禍獣ホ怕害てその募ゐ窓ぜそ。利勇ハいよ〳〵さぐるさホ間切毎ゐ牌ハうらにして。をゝ〳〵勇士を募るとそ。偽國乃宝珠も失くる一顆さ人曚雲ぐまホ落ゝ〳〵靡て従ぐるの稀しさおろして。曚雲ハ。筑登之五十人ゐ分付して。彼禍獣を牽し。王女ハうしるひもゝんみふ。もや麹ま追ひ到せろう。某夫婦カと竭ゝ〳〵。こゞしが役ハ鑿て留べれども。こゝに在さんるハ。いとも危し。こゝ〳〵この山ハ西へくぶりて。海邊へ走去まへゝ〳〵ものづゝら虎口ハ脱るまホふる。おゞとまうしもめそ。赤外面へ走り出づ。王女ハ父王の夢ゝるよし。ハ。こゝも果そ。こゝそもいうふ。とばり塞りて。阿と叫びつゝ倒且ゐくバ。查國吉慌忙く扶起し。慰んとも是ばかりも又遠恨の涙とゞめあくど。おろれるよ。王女ハいよ〳〵悲傷ホ胸うち励し。さらく落ゐへと勸めまうるもあゞ。王女ハいよ〳〵沈てまもあゞ。不幸ほして艱若ふ堪ぎいみこと殺しと欲るよ。世よ存命ろふ何の為そ罪ゐそはしハいひとて。御免ううぶりてん。と急くぐ。おろる母ハ枉寃ホ報れ父王さ人禍獣ホ。おん牙をおろされるふとゆて。いそで命を惜むべた。勲ホ顕ゐの。息のれがこそおをもおり人。曚雲が賊兵ハ。こゝにもまゝでしもめゝび。刃ホ伏こゝれ死人脱去ること。宣ハゝれハ。查國吉声ハあり当

ろいひどなれ仏形勢うれ。逆賊曚雲を討亡し國中を掃清めて
て孝ともまうさめ。日本のいみしへ神功皇后いこうら數の軍兵をおて三韓なさん対従へるえろ。
足姫尊男児なくでハ冠をゐるおぬ
被ぐ。撩者の家を走り出さるふても。めじ夫婦ハいうるりの世を避
ろうおて。かくまで志の信ある
阿容と曚雲属従ふと。
こそ有難くれと頻ゐ賞嘆
ちゃふおう。彼ホ冠を懲ぐ
脊しく虫かふ式えくれ
かりにえぞおりて。

ゐ事を限りる。原来件のものハ山祇なるふてめんぞくんこの
日ま。それが住家ことして起外セハ彼処る。壽松の樹蔭みそあるけり
とじめそ曉ろそろうもおふ。志じそうさ伏拝ミ又山路を西へ下り
て。浦曲ゆそく走りまふ。洁処ゐ喇叭噴吶銅鑼鼓の音海山ゐ響
つろうて曇しく。寧王女ゆ脱しるせそと罵りつ。曚雲が賊兵四五十
人まわく器械を引捉て追蒐るつ。怪ゐ獣を。真先ゐ駈立て。既ゐ
事急なりしぐ。査國吉倍とえええりて。某ここに命を捨ぞハ王女へ立
地ゐ悪獣の牙ゐかゝられるふべうくん。そうく走りまえ」とまうけ」も果
そ。剱を抜翳して。件の獣ゐ
矢庭ふうけ倒さんと跳かゝれを。査國吉ハ。ゆ身なゑりそ。これを避
ミたび三遍その後方ゐ立徳りて。剱を閃つ刺んとするに怪しき哉。




査國吉
身を褐獸の
死して
寧王女
舟
鵜亀よ
借る

さくこう 査國吉が剣ハ三段四段ゐ折飛て。半畝ある金瘡にさへ一度ゐ裂く
鮮血流ル。瞑眩て跌く処ゑ。褐獣ハ牙ゑ張り。査國吉が膝口ゑ太股
ゑかけて喰ひ裂。一揮ふるうて。振ふふんとするに査國吉ハなほふれを。
悪獣の頭と抱えとめて。捻挫んと。互ゐ嘯く声。五臓ゑ絞るごとに一當
下賊兵ホ走りすゑく。戟なとりのべ。査國吉が膳ゑ左右より刺そ
ん憐むべし。南家臼傾えて。紅粧をちじ遂ゐ魂散魄寄りて。黄泉へ流ルゆく。勇士の寃期ぞやさはしえその間ゐ寧王女ハ惜うね
身も査國吉が忠死ゑ化ゐせ。とそひえ。道五七町落延さ。中海邊
ゐ到てのふお。そうふびも。胞兄等とおぼしえ少年忙く独木舟をさ
よせく。王女ゑ扶乗し進ふせ。櫓ゑ推揖ゑ操りつ。槽ゑ生をみ。舟の
快こと矢ゑ放るのごく。瞬間ゐ洋中いと遠ゐでるりにけれ。さるほど

曠雲が賊兵ホ喘く追ひすふうて。いとごろに参ゑ捺りその舟久せ。よび
かくれど。浪の音のこ回答して。舟ハ漸くに迷うくなりつ。褐獣もその遙
るる処こそ。浪路を渉して。追んともせざりしが。王女ハ不思議ゑ虎口
を脱ルて。少年ホゐ對ひ。そも汝ハ何人の児ぞ。ゑ危ゑ
救ひふる名告ゑしいへと宣へば。二人の少年ハ櫓械をとりるのべふ。発
たくまうけ中。某ホ兄弟ハ中城の按司毛國押ゑ子ともあく。兄が
名ハ鶴。弟ハ亀と呼れい。父國押ゑ討亡てる日。親族査國吉ゑ情ゐて。
母ゑ扶て辛じて脱ル去。越来の山中ゐふく。鮮しく。西三日を経ル
ゐ。ゑほ其処ゐも留てがふく。産月ゐれバ道くろ困うね。母ゑ撫ふ扶
乗。同胞これを卑つ。大宜味羽地の果までと。落ゆく折ふ。金武
ようハ西なりる。曠野を過ると。母新垣ハ俄頃ゐ産の氣けきて。

いうみもさべす。纏さ橋をかたおろして兄ハ芥を買りて歸んとて富荒川の上ゟ赴た。ま〻兄ハ追ひ留んとて同胞もどし。母の傷ゟ離まじ。間ゟいと怪しき老女ゟ母親を殺され胎内の児さへ彼老婆が奪ひ去りつとおぼしたゟ。哀傷のあまりこゝなれいんがさへも仇の往方ゟ知ばりし。迷恨ハ比んやうもめくびかくて詰朝母の亡骸を水葬せんとて。富藏河の上ゟ赴た。父毛國丼が亡魂ゟ誘引まこの海邊ゟ迷ひ來くゆみ。その夜の暮ゟ。父ごのみまう。汝ホ且くこゝに留りて。寧王女ゟ救ひたまり。小琉球へ槽渡り。爲北ゟる赤瀬の碑のほとりゟ潛せもれ。彼赤瀬の碑ハ國祖天孫氏の主ゟるのなり。これ曩ゟ王命ゟ奉て。彼処ゟ到て。幣帛たてまつりてその事驗炤然ゟるよし。面りゟえりて。王女辛じて其処ゟ赴た。彼碑ゟ褥のろぐ。遂ゟ禍ゟめんして福ゟあひまぐべくこの浦ゟ独木舟の漂ひ著ことおくぶこれ王女の來ろんこゟる。遠うぶべとなりへ。王女のもん容止。ハ此ごくゆめて。箇樣ごくなる。衣服を被まくりとて。いと精細ゟ說ちくせし兄ごの兄がこそろも。ゟがこそ。ゟれも。その愛ハ一臭違うぞ。かくてそ兄まこの処ゟありて。毎日ゟ海上ゟ眺くしして。私の流ゟよろをろよ。今朝しもこの私忽然として岸ゟ若ゟけれがさそ王女のまうこんる。遠かくべと說びくこそこうの密ゟすらをりてのしくの果ちくこ同胞が志ゟいこそろの外とて涙ちしくこつて回答うせしこの王女ハらの物語ゟ聞て。頻ゟ感潰し。忠うるうれ毛按司。その通狂寃ゟ訪れく。その実ゟ母主ゟ殺ハ。汝ホが孝心世ゟ傷稀ゟり。嗚乎この父はして。この子ゟり。赤憐むべたハ。新垣ゟ横死ろり。世ゟ

人ゐも捨くれ。つゐうん富貴三省なく有ゐの父王そふ。禍なの脱且ゐのうで妖賊よ住ゐ篡且。歟の牙ゐかけられて。墓うく薨ゐひゐる。過世あ中ゐ命運ゐり抑ゐ。ゐ中城の世子殿ゐ脱且去。廉夫人真路。査國吉ホ恩ゐ荅く命ゐ預せ。ゐじゐ人ぐ。ゐ此ゐくなり。終ゐ箇様くなりそく。流谷山ゐる獵者夫婦が誠ひつ。又宜ゐう。流谷山の獵者夫婦ゐ。ホが亡父母の。假ゐ敵をあふじそ。それゐ宿じそふゐやゐぞや。死そ。その後も主ゐ救ひ。子ゐやゐかくまでよ有それりの歟。と私答よ。導源つ卿ゐ人ゐ。ゐほうく悲く。涙さしぐまり。さて。流谷山下の海邊より。水行三日なりでる。小琉球へ到りそよ。この私の走ること射る矢よりも速ゐれど。水の上穏ゐして。その曉ぐゐ。小琉球のゐ島北よ去ぬ。かくて主從二人岸ゐのぼりて。彼此をえゐふゐ。七ッの時切二百余の村あり。とゐじゐ似そ。嶋の中なる邊土ゐて。里も遠く人かゐのぐ。汀ゐ太ゐる。蘆のゐ生繁りて。浦風ゐ戰ぐ。左右ハ入江はして。路只一條ゐり汀をそゐるゐ。十歩可はして。赤瀬の碑ありけり。高さハ二三丈もあるらんとゑえて。その形圓なれ柱のごく。碑の面ゐ。ゑりの美人を勒ゐしゐれがその面貌。さゐぐゐ生るぐごし。この國開闢ーとゐて。天孫氏の建ゐふり。と世くにいひ傳るもうべふり。その景迹実ゐ人他ゐあゐび。碑の周ゐ。ゐ蘭とゐふ草磯馴松の外ゐ塵もなく。上文ゐる事。いひも竭ーがじ。王女ハこゐふ来ゐるその朝より。凡折ゐく。彼碑よ禱ゐふ行ふ詭亀ハ海蘊を拾ひ木の子。草の実ゐ摘




噂雲が徒
禍獣を招て
寧王
過ち

とりて。王女ふ勸め進ふし。同胞もうち食ひて。主従やうやくふ饑ゑ凌ぎ。日暮るゝ。臥ともめ〳〵で夜をあかしけり。一日。二日とるこ〳〵まふ。筭三日ゐ至りて。水鳥數物ふ駭ろ〳〵ゑれどゞ。こゝさゝしてゐまうしうべ。王女ハこれなうち瞻て眉を顰ろ。宜ふやう。私もかように里も遠ゐ。かゝれ入江ふ棲むるの慌〳〵く群ゞうこいく〳〵怪〳〵や曚雲が賊兵ホ。こゝに追ひ逼りねともゐるかと宜ふ。その言いまゞ訖らぞ。四五十人の賊兵嶋酋長ふ郷導さしく。驀直ゐおよせ来つ。雉くとり囲く。王女を生捉んと。ひしくくみぞ。主従の事急はして。舊の私ゐ乗もゐぞ。今ハ脱ゞこと。ぞえる〳〵。落亀へうゞしく。そゝ敵なりけ隔ゐうちふりく。防ぐ戦ふ行ゐ。少年と。ゞひ倆り。砍ろゐろ〳〵の五六人ふ及べり。されバ

とく。同胞ゐ。十五ゐゞも足〳〵ぐれ小腕ゐて目ゐあるる賊兵ゐ。防ぎ留べとゐもゐく。後ゐ力衰へ勢ひ究く。兄も生捉る。賊兵ホ。こゝに王女ゐ生捉んと。すゐふ王女ハ忽地ち立ゐふ。賊兵ゐハこれを拔く。ぐ〳〵こゞんと砍ふ。勢ひ猛く立ゐふ。賊兵ゐハこれをえゝ大ゐ驚ゐ。これこそ仕しよ違ゐ。王女ゐハ。神の憑く狂ゐぞ。ゝ禍獣ぞりて。囓ふさせよ。と異口同音ゐ叫ぶ行ふをと。あつ後陣ろう。彼悪獣を放ろ。鼓を鳴ふし。岡の声を揚。人と獣ニ力を戮ーて又むく〳〵と競ひ蔦ろ。寧王女ハ物ともせゞ剣をとり座して。彼禍獣を刺んとしゐ。刃ハ鍔際より戛と折れて。鞘のみ主のゐゐ残ろう。今ハかうとゐおせうぐ後ろゐふ。赤瀬の

碑の脊小躰と。これ汝看として。一息吻とはくしもめくと。禍獣ハ
もも〳〵哮狂ひて。矢庭よ追ひ逼りつ。石の面ゟ骸くり。美人を
王女とや見くりけん。突然として。蜀こはけバその碑傍しふ倒且
かくと。天地も崩くづれ音して。さしも猛き怪獣も半身土中
へ打伏うさればを砕且。肩腰を折とて。りうともに石よ打れこ
めふなりて。死ける賊兵少くこれを建と。一万七千八百二羊の今ゟ至るまで暴風暴雨ゟも
打ど傾と。揺ぬ石もおのづく倒且かくて禍獣を。壓詰れこそ
不可思議なれ。さる世ハ澆季ゟ及ぶとも。祖神の威徳ゟ厚此
石ゟやどまりうん。禍獣ハ反起んとて蠢ぬ。もぐしこそめて
けれ。口ゟう泡を吐と。千尋の練ゟ繰出ごとく。泡の消ぬふ
隨ひて。獣の形土中に滅墾ぬて。先陣敷
石ゟ打且て。遂ゟ禍獣さへ失くれバ後陣も共ゟ辟易して。左右
るゝへ驚もかくらぞ。にげんとて。王女を拏りさバ後難脱且ざ
ちとやらひんぬれ生拘れと。罵てめひて。三十餘人鋒ゟ揃へ嘈
れ叫く撃てかゝれふ。王女ハ石の倒るゝとそれ。土つれのかゝふ袂を
布且て。進退自在るゝバ。剣さへ折且くされバ天を仰く嘆息して
ゟ束く死ふつれふ折くら。誰とそ志ぐび汗ふ茂れ蘆の中より。
箭を射出すゟ。蠡の花ぶごとく。一箭ゟ二三人を射仆ふ鏑
の鳴響く隨ふ。命を隕とを賊兵十八九人ふ及びしゟ。こゝそもい
うふと驚れ怕且二人の少羊ゟ生拘くれバ。軍ゟうるひあれ。怪げ
なれ王女を生拘くんとて。可惜命ゟらしるひそと。敢動く捕亀を





おくれ先ふと立足もなくみる迚きりね。富下枯蘆の穂ぞゑぐくとして。私を水除め槽よせつ。身の丈七尺豹の目猿の臂。威風凛然くれ壮士年の齢ハ。三十七八なるふんどおぼしくて。腹巻よ。小手臑當して。黄金作の太刀ハ佩被ける箙笠掻遣捨弓杖投うけ。肉りこれ私をもなれ。岸ふのぼり。王女のほうに歩のこうる。これハ是いうまでもなく人ぞ。清和天皇七世の皇孫。鎮守府将軍陸奥守。源義家朝臣の嫡孫。六條判官爲義の八男鎮西八郎爲朝なり。王女ハ目ざめくこれをこそ。ある曹司と呼びかくる。声ざゑハ又白縫ふ。事だかりも異うぐひすぞ。それもあいぐ忙しく。走りよんとすれバ石の下ふ布巨し袂も。拂と對離る。契りハぬるゑ吾妹子ふ。声ハ似れど面影ハ。ゑぐ妻ふね他し人よ夫と呼るも不實く。

為朝ハもだしうち觀てゐるけを。抑爲朝いかなる八月十六日。風濤の難ふ係り。船破わく。妻子沈淪し。その劣贖岐院の冥助ふうて。脱ぢぐれた死を脱れ。そゑ未ゑるまでの物がたりハ拾遺篇の首よ挽起をと。續弓張月續編巻之六畢

椿説弓張月續編巻之六

此書ハ曲亭翁の著述ゐて。北斎主人の繍像とあろまり。凡五編一帙かのく六冊ゐて全本と。既ゑ海内ゑ発行せり。四方の看官よろ〳〵高評を仰ぐ而已。

文化五稔歳次戊辰季冬吉朝

本所松坂町

書賈　平林庄五郎梓

徐舟詩稿